

『この学力、この人間力では』

今朝のNHKのニュースが伝えている。

「大学生の学力が余りに低いので、大学関係者が学習時間の調査を行った結果、4.5時間未満の学生が50%以上である」と。

09年春4年生の大学への進学率が初めて50%を超えた。1965年には10人に一人、1990年には4人に一人だったのが、今や二人に一人以上が大学卒という時代だ。

ところが、「最高学府」で学ぶ若者が増えたことを喜んでばかりいられない状況がある。

東京都心の閑静な住宅街に、某私立大学のキャンパスがある。偏差値は40程度の底辺校といわれる大学での、平日の授業風景取材したレポーターの記事を紹介する。

現代史学の講義中で、生徒は約200人、講義に背を向けておしゃべりに興じている学生はまだかわいいもの。見渡すとハンバーガーとポテトを頬張る女子学生、4人で固まってポータブルゲームを遊ぶ男子学生、大きなイヤホンをつけて肩でリズムをとる者、机に突っ伏してイビキをかく者…。ペンを持ってノートに向かっているものは数人だけ。

講師が声を張り上げる。

「静かにしなさい。そこッ、テストのときに食べ物を食べていたら、即アウトですからね！」

啞然とするような注意だがそれぐらいでは生徒は見向きもしない。数分後、講師の堪忍袋の緒が切れた。

「講義は聞きたい人だけにやります。出席はしたことにしてあげますから、聞きたくない人は帰ってください！」

一瞬、教室が静まり返ったかと思うと、学生達は次から次へと立ち上がり、教室から出て行った。残ったのはたった15人だけだった。

大学生の学力低下が叫ばれて久しい。大学進学率が上昇したことや「ゆとり教育」が導入されたことに原因があると指摘する人もいるが、実際に大学を歩いたその記者は、その深刻さは「学力低下」という言葉では表せないと結んでいる。

学力の状況も深刻だ。

ある工業系の大学生の状況である。微分・積分など、高校レベルの学力がない程度ならまだマシな方だという。一次関数までレベルを下げてでもまだ理解できない学生が多かったのも、ひょっとしたらと思って九九の計算を解かせてみたら、全問正解したのは半数以下だったとか。

埼玉大学の岡部恒治教授は語る。

「私が『分数ができない大学生』という著作を出してから 10 年が経ちますが、大学生の学力は当時よりもひどくなっている。現在、大学の半数以上は、正規の授業とは別に、小学生から高校生レベルの国語、数学などの補習授業を行い、学びなおさせているんです」

こうした補習授業は「リメディアル教育」と呼ばれ、昨今の日本の教育界のブームになっているというのだからたまらない。リメディアルとは直訳すると「治療の」「矯正の」「補習的な」と言う意味だからだ。

高校レベルの学力を持たずに大学に入り、4 年間勉強をしないまま遊んで大学を出て行くのなら、社会に出て働くほうがよっぽどいい。働く意欲もあり、働く中で学べることは沢山あるはずだ。親の脛をかじり、遊んで過ごす 4 年間の大学生活では(そもそも学ぶ意欲のない者を大学に入れていること自体が問題なのだが) 職に就いたときの仕事の仕方も楽しみ方も分からないのではないだろうか。

環境教育が成熟しているスウェーデンでは、高校を卒業して大学に入るのは 10 人に一人。その代わり、高校を出て一先ず社会で働いてから「こういう勉強が必要だ」と学問の必要性を感じて大学に入りなおす人が 10 人のうち、3 ~ 4 人いるようだ。

全ての人に大学教育を受けるチャンスがあるといえは聞こえはいいが、大学の現状を知れば知るほど、日本の国の先行きが心配になる。私たち義務教育に関わってきた者たちは、高等教育に責任を擦りつけるのではなく、今一度「子ども達の義務教育 9 ヶ年に責任を持つ」ことがどんなことなのかを確認し合う必要がある。